現代中国における外来語としての日本語

——「料理」について——

小池 清治・清地ゆき子

研究目的
文化庁が発行する『中国語と対応する漢語』（大蔵省印刷局, 1978）には、「日中両国語における意味が著しく異なるもの」として「先生」、「勉強」、「迷惑」、「料理」等60数個の語彙を掲げているが、これらの語彙の中には現代に至り日本と同じ意味で使用されるようになった語彙がある。たとえば、「料理」は、前述の書物で、「（中→日）処理をする」と例：＜料理一切＞すべてを処理する。（日→中）例：料理する＜做菜＞料理したものの＜做饭＞中国料理＜中国菜＞」あるが、最近中国で発行された『中国流行新語詞』（注1）には、「飲食専門。原為日語。」（注2）『日本語の表現』（注2）という記述が見られる。また日本語で発行されている料理本の題名として「低油無塩料理」（注3）のように、「菜」ではなく「料理」が使用されているものもある。

本研究の目的は、このように古代日本と中国で全く異なる意味で使用されていた語彙が、現代に至り日本でのみ使用されていた「料理」が逆に中国へ移入され、日本からの「外来語」として使用されている語について考察されたものである。

研究対象語彙は、「料理」、「写真」、 「人気」としたが、本稿ではその中の「料理」についての研究結果である。

研究目的は、①対象語彙が「外来語」として中国に移入され定着したと言えるか。②言えるとしたがそれを因（外的要因、内的要因）は何か。③移入の特徴は何か。である。

注1 欧陽国『中国流行新語詞』（中国人民大学出版社, 2000）
注2 （）は筆者訳。
注3 夏理『低油無塩料理』（农村読物出版社, 2001）

1. 両国における「料理」の意味
「料理」の意味について、中国発行の辞典（注4）で確認すると、
a. 「世話をする。面倒をみる。取引計らう。手入れをする。」
b. 「物事をはかりおさめる。きりおりする。処置する。」の意味にまとめられる。また日本発行の辞典（注5）では、
c. 「物事をはかりおさめる。きりおりする。処置する。」
d. 「食物として口にあうように材料を整え加工すること。調理をする。」
e. 「調理した食物。またその艶穂。」

1. 両国における「料理」の意味
「料理」の意味について、中国発行の辞典（注4）で確認すると、
a. 「世話をする。面倒をみる。取引計らう。手入れをする。」
b. 「物事をはかりおさめる。きりおりする。処置する。」の意味にまとめられる。また日本発行の辞典（注5）では、
c. 「物事をはかりおさめる。きりおりする。処置する。」
d. 「食物として口にあうように材料を整え加工すること。調理をする。」
e. 「調理した食物。またその艶穂。」

1. 両国における「料理」の意味
「料理」の意味について、中国発行の辞典（注4）で確認すると、
a. 「世話をする。面倒をみる。取引計らう。手入れをする。」
b. 「物事をはかりおさめる。きりおりする。処置する。」の意味にまとめられる。また日本発行の辞典（注5）では、
c. 「物事をはかりおさめる。きりおりする。処置する。」
d. 「食物として口にあうように材料を整え加工すること。調理をする。」
e. 「調理した食物。またその艶穂。」

注4 『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社, 1994）
注5 『辞海』（上海辞書出版社, 1999）
2. 文献による「料理」の古典的使用
両国の文献においては、「料理」がどのような意味で使用されていたのかを前述の文献分類で確認した。

a. 「世話をする。手入れをする。面倒をみる。取ること」の意味で使用されている文献例

①「講師伯日、汝若為選官當好料理此人」
（『世説新語』徳行 劉義慶、南北朝・宋）
（講師に薦められて、汝、若し選官と為らば、面倒に苦労する人を料理すべきと）

②「料理、共草倶長、未須料理」
（『齐民要術』巻五第46 順輸白楊 知恩、南北 朝・魏）
（検査し、草と共に長するも、未だ料理するを须ず）

③「未須料理白頭人」
（『漫興』詩 杜甫の七言絶句詩、唐）
（未だ白頭の人の料理をするを須ず）

このa.の意味での日本文献での使用は確認できなかった。しかし、次のb.の意味では日本文献（③～⑦）にも中古の頃からの使用が確認できる。

b. 「物事をはかりおさめる。きりもりする。処置する。」の意味で使用されている文献例

①「今史以他答、復往問胡、求其料理」
（『太平廣記・異凶』巻三〇一 戴孚、唐）
（今史を以って答え、復胡に問って其の料理すを求む）

②「黄芽亭子小楼台、料理指出時費才。种风怀忘不得、夕阳穷暮海棠开。」
（『遊愚園』郁達夫、1917）
（黄芽亭の台に居ながら、山と川をうまく配置する才能が問われる。吹く風は忘れ難く、夕阳は沈みかけ、海棠を照らせている。）

③「並随事料理。」
（『今義解』営繕・収蔵庫社、843）
（並び事に随ひて料理せよ。）

④「この料理、しがくにおもひきたり、おもひてゆべくべし」
（『正法眼藏』第二九・山木経 道元、1253）

⑤「南方へ取送りたてまつらんとせられけるが、とかく料理に滞つて」
（『太平記』三二・茨宮御位事、1374）

⑥「万事万端思い切りがてく、世に処し政を料理するにも卑劣でない‥」
（『老余の半生』『福禄自負』福沢諭吉、1898）

⑦「天下の政治を料理するなど、事務を振ひ下る、‥」（『破戒』島崎藤村、1936）

次に日本文のみ使用されているd.（動詞）とe.（名詞）の使用例を確認する。

d. 「食物として口にあうように材料を整え加工すること。調理をする」（動詞）の意味で使用されている文献例

①「料理食物」（『日本古文書』5,762）

②「内膳司率諸氏伴造供本供料料御膳（儀式）三・大営祭儀在、平安時代」
（内膳司、諸氏の伴の造を率いて、各々職に供える御膳を料す）

③「上の風に丸を料理して食みてみたいと‥」
（滑稽本『浮世風呂』式亭三馬、1809）
（大阪のようにスッポンを調理して食べてもみたいと）

e. 「調理した食物。またその膳部」（名詞）の意味で使用されている文献例

①平城宮出土土器

須恵器の蓋
（『平成城出土墨書土器集成』Ⅱ 奈良国立文化財研究所史料第31冊、1889）
この「料理」と「食」の意味は、日本では上代から使用されていたことが確認できる。これは中国語の本来の「処理をする」という意味から派生した日本独特の使用と考えられる。日本での「料理」の意味変化については、樋竹民の「漢語の意味変化について」（注9）に、「料理」の意味の縮小化である。一般的1の「味物料理」の表記について佐原真の『食の考古学』（注10）に、この土器の年代は、760年から780年（天平宝字年間）であり、味物料理」は食物をととのえてつくったもの、を指すに違いない、今日本で使用している「料理」の起源はここに求めてよいだろう。とある。本稿では、「料理」の語源にまで言及せず、歴史的には両国で一部別々の意味で使用されていたこと、前述の「料理」の意味は日本でのみ使用されていた「味・用法」であることを確認することにとどめる。

注9　樋竹民「漢語の意味変化について」（『訓点語と訓点資料』1997.9.1997）
注10　佐原真『食の考古学』（東京大学出版会、1996）14～16頁

3. 人民日報・北京日報・北京晚報にみる歴史的使用推移

それはこの「料理」がどのような経緯で、現代中国に移入されたのか、その時代の使用言語が確認できるとともに、大衆の文化、生活を知ることができる新たな対象を、中国共産党中央関係の「人民日報」と、首都北京で発行されている「北京日報（北京市共産党委員会発行）」、「北京晚報（中共日報発行）」である。

調査は移入の推移を採るため名詞、動詞の二つの品詞に分け、さらに名詞は、合成語の構成形式により3分類とした。

「料理」は「並列型」の複合語であるが、この「料理」に他の名詞等がついて合成語を構成する場合、次のようなA、B、Cの3形式が考えられる。同じ形式をBとCに分けたのは、C形式は日本語では見られない使用例であり、中国語のみの使用が見られるということは、語彙の定着を確認できるものであるとして別形式とした。

なお、この調査は各社発行の新聞記事全文（CD-ROM）から該当例を調査分析したものである。

①名詞としての使用

A形式（「〇〇＋料理」）（名詞＋名詞）
例：「日本料理」、「中国料理」
B形式（「料理＋〇〇」）（動詞＋接辞）
例：「料理部」、「料理店」
C形式（「料理＋〇」）（動詞＋接辞）
例：「料理機」、「料理台」

②動詞として使用

D形式　例：「炊料理」

この調査結果から次のことが確認できる。

①「外来語」としての最初の使用は、人民日報が1978年、北京日報が1989年、北京晚報が1993年でいずれも意味文類形式のA形式であり、A形式の総使用件数もその他の形式と比べ圧倒的に多い。

②「外来語」としての移入は、A形式からB形式、B形式へ、そしてD形式へとその範囲を広げている。

③「外来語」としての使用は、年代と共に著しく増加傾向にあるわけではなく、20数年間にわたり徐々に増加している。

④「中国語本来の意味」としての使用は、3紙ともに創刊以来明現在まであり、「外来語」としての使用と共存状態にある。

使用例からみる移入のプロセス

3紙の使用例から移入形式の推移を分析するとその移入のプロセスが明確になった。

1）名詞から動詞へと使用範囲を拡大している。

2）名詞としての使用は、

①日本関連記事の中での引用形式
<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>A 形式</th>
<th>B 形式</th>
<th>C 形式</th>
<th>D 形式</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1978年</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1979年</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>1980年</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>1981年</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>1982年</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>1983年</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1984年</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>1985年</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>1986年</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>1987年</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1988年</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1989年</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1990年</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>1991年</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>1992年</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1993年</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>1994年</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>1995年</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1996年</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>1997年</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>1998年</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>1999年</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>2000年</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>2001年</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>会計</td>
<td>33</td>
<td>8</td>
<td>2</td>
<td>47</td>
<td>77</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>0</td>
<td>6</td>
<td>16</td>
<td>31</td>
<td>57</td>
</tr>
<tr>
<td>57</td>
<td>22</td>
<td>15</td>
<td>11</td>
<td>120</td>
<td>182</td>
</tr>
</tbody>
</table>

②非日本関連記事の中での引用形式
③非日本関連記事の中での非引用形式の順に推移している。

3）合成語の構成は、概ね
①「国名（日本・中国）＋料理」
②「国名（日本・中国以外）＋料理」
③「名詞（国名以外）＋料理」
④「形容詞＋料理」
⑤「料理＋接辞」（日本と同じ使用例）
⑥「料理＋接辞」（中国独自の使用例）
へと使用が拡大している。このプロセスを確認するため使用例の一部を挙げる。

①日本関連・引用形式

*…，以京都的名菜 “懐石料理”，招待中国人。（人民日報 1978年10月28日）
（京都の有名な料理“懐石料理”で中国人を招待した。）

②非日本関連・引用形式

*…，每年新年期間，大家都来这儿做“中华料理”，…。（人民日報 1984年1月31日）
（毎年新年になると、みんながここに来て中華料理をつくり…）

③非日本関連・非引用形式

*品嘗中国料理也是我们的重要一課。
（人民日報 1994年10月22日）
（中華料理を味わうことも我々の仕事の一
つである。)
④「国名（日本・中国）+料理」
* 一个台湾人来吃顿“中国料理”…。
(人民日報 1983・1・30)
(一人的台灣人がやって来て中華料理を頼んだ。)
⑤「国名（日本・中国以外）+料理」
* “今晚加班吗？请个假吧，我和鲍毕请你吃巴西料理。”
(人民日報1998・5・31)
(今晚は残業しますか。暇をもらいなさい。
私と鲍毕があなたにブラジル料理をごちそうします。)
⑥「名詞（国名以外）+料理」
*…，炸油条、紅燒魚、做线面等，况且餐桌上
上１／３的料理来自厦门。
(人民日報1994・6・10)
(揚げパン、煮魚、麺などが食卓の１／３の料理はアモイからきた。)
⑦「形容詞+料理」
*…，那是我家的傳統菜色，也是她的拿手料理：…”
(北京晚報1999・5・5)
(これは我家の伝統的な料理で母の得意料理でもある。)
⑧「料理+接辞」（中国独自の形式）
*…，料理柜、灶柜、排油烟机，燃气灶具等系
列家用厨房设备…。
(人民日報1993・7)
(調理棚、ガス台、換気扇、ガス器具などの
システムキッチン…。)
この「料理（国）棚」の使用は日本では見られず、中国語の造語力（注11）によるもので、
この形式が中国で使用されようになったということ
は、「料理」が「外来語」として中国に受け入れられ定着しつつあることの表れであると
考える。

2．動詞
* 大酒店、大饭店一般都有名厨料理，技术力
量强，卫生服务，又稿得好。
(人民日報1995・9・6)
(大きなレストランやホテルではだいたい有名
なシェフが料理を作り、その技術力は優
れていて、衛生やサービスもすぐんだらしく…。)
注11 奥永健 『中国語の語法の話』（光生館,
19851）

4．その他の国内紙にみる現状分析
4.1 8紙にみる外来語としての使用率
前述の3紙の調査結果から「料理」の移入の一
つの特徴として、「外来語」としての使用と「中
国語本来の意味」としての使用が共存状態にある
としたが、その共存の比率がどの程度であるのか
その他の国内紙8紙において調査した。（調査対
象期間1999年〜2001年10月29日まで）。国内紙8
紙とは、环球时报，江南时报，健康时报，华东新
聞、华南新聞，国际金報，市場報，讽刺與幽默の
8紙で，人民日報社が著作権を持つ「人民網検索」
から調査したものである。

新聞8紙にみる
「外来語」としての使用と「中国語本来の意味」での使用の使用比率

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>「外来語」</th>
<th>「中国語本来の意味」</th>
<th>総件数</th>
<th>「外来語」としての使用率（%）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1999年</td>
<td>11</td>
<td>31</td>
<td>42</td>
<td>26</td>
</tr>
<tr>
<td>2000年</td>
<td>28</td>
<td>35</td>
<td>63</td>
<td>44</td>
</tr>
<tr>
<td>2001年</td>
<td>26</td>
<td>35</td>
<td>61</td>
<td>42</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>65</td>
<td>101</td>
<td>166</td>
<td>33</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：以上データは調査期間内での平均使用率を示しています。
この調査からも前述の3紙での調査結果と同様、
1999年から2001年（10月29日まで）の3年間においても「料理」の「外来語」としての比率は増加しつつあるが、「中国語本来の意味」と共存傾向にあたることがわかる。

4.2 258紙にみる使用例の分析

最後に、「料理」が中国全土に「外来語」として使用されているのか、全国紙地方紙を含めた258紙を対象にその使用例を確認した。（調査対象期間2000年から2001年10月29日まで）

１「名詞（国名以外）＋料理」
＊大連海鮮料理は鮮美で獨特の特色があり、大連の海鮮料理を愛好されてるようです。
（中国商報 2000.4.24）
（大連の海鮮料理は味がすばらしく、独自の特色があり、あなたに美味しい味を味わってもらえるでしょう。）

＊魚料理の吃法：魚料理上都会有柠檬、……。
肉类料理的吃法：……。
（江南都市報 2000.2.23）
（魚料理の食べ方。魚料理の上には必ずレモンがあり……。肉料理の食べ方は……。）

＊取用的調味料不應直接淋在料理上，應放在盤子的外側。（江南都市報 2000.2.23）
（調味料は直接料理にかけてはならず、皿の外側に置くべきである。）

この使用例は「料理」が名詞として単独で使用されている例であり、定着度が伺える。

2「形容詞＋料理」
＊甘味料理皆可使用、……。
（海峽都市報 2001.10.11）
（甘い料理や塩辛い料理には皆使用することができる……。）

3「料理＋接辞」（中国独自の形式）
＊……作為目前市場上最先進、品質最好的食品料理机……。
（解放日報 2001.6.26）
（目下市場の品質の最も良い最新の調理器）
具として…)

④動詞

* 因而，近几年來，每逢假日，我必料理一餐
火锅…。
（三秦都市報 2001年8月2日）
（だから，ここ数年週末の度に必ず鍋料理
を作る…。）

* 保鮮膜轻轻一撕，便可保住食物的美味，为
料理食物带来极大便利。
（北京青年報 2000年5月14日）
（サランラップをちょっと切り取るぐらい
で，食物の美味しさを保つことができる。
食べ物を料理することが，とても便利になっ
た。）

このように、「料理」は「外来語」として，前
述の3種以外の全国紙地方紙にも使用されている
ことが判明し，その移入が中国全土に及んでいる
ことが確認できる。

5. 移入の特徴

次にこの移入をもたらした要因（外的要因と内
的要因）を考える。ここでいう外的要因とは，移
入を容易にする社会的背景等を指し，内の要因と
は，「料理」という語彙から発生する要因を指す
ものである。

5.1 外的要因

まず移入の外的要因の一つとしては，人民日報,
北京晚報，北京日報で確認した通り，移入開始時
が1978年であり，日中国交回復後，日中友好条約
成立の年であることから，戦後の日本と中国の政
治，経済，文化的交流が言語の交流をもたらし
たと考えられる。「外来語的吸收要根据国情与需
要，…」（外来語の吸収は，国の状況や需要
により…）（注12）と，日中国交回復が
この「料理」を「外来語」として受け入れる契機
となったといえる。

外的要因の二点目は，「中国の市場経済の改革，
開放に伴う，中国国内での需要」であると考える。
本来，中国語においては，「おかず」の意を表す語
彙は「菜」であり，「中国料理」は「中国菜」，
「日本料理」は「日本菜」と表現していたわけであ
るが，市場経済の改革，開放政策により，日中間
の物流も盛んになり，食文化の豊かで中国において
「日本料理そのもの」や「日本料理店」等の商業に
関する興味や関心，また「日本料理店」の営業に
伴い，日本で使用していた表記を変えることなく，
中国でもそのまま使用されるに至ったと推察する。

5.2 内的要因

前述したとおり，元来中国では「日本料理」を
「日本菜」と表現していたが，これは中国語とし
ては使いにくい3語の合成語である。中国語基本
の語構成である2語の複合語のほかに複雑
な合成語を作りやすく，この語構成の点から「料
理」は中国語として使いやすく，定着化につながっ
たものと考える。

内の要因の二点目は，動詞としての「料理」の
もつ意味である。中国語では，今まで
「料理する」は，「烹調」，「調理」と表現してい
た。「烹調」，「調理」は，いわゆる「調理する，
おかずを作る」という意味で，日本語の「調理する」
の意味に近い。日本語の「料理」には，前述の日
本の辞典でも確認したように，「食物として口に
合うように材料を調理すること」（『日本国
語大辞典』小学館，1997年）や「材料にかかる手を
加え，味をつけておいしく食べられる状態にする
こと」（『時代別国語大辞典』室町時代編五三省堂,
2001年）があるように，単に「調理する」のではなく，
「おいしく，食べられるように調理する」の
意がある。この「料理」のもつ意味が中国語の
「烹調」，「調理」より使用意味範囲が広いことが，
「料理」が中国に「外来語」として移入されに
至った，内の要因の一つと考える。

三点目は，中国語の持つ造語力である。中国語
の複合語がさらに複雑な合成語を造る一つの形式
として，「機」や「台」のような接辞をつけて合成
語を構成する（注13）が，「料理」の場合も，並
列形の複合語「料理に」，「料理に」や「料理台」をつけて
「料理機」や「料理台」のような複雑な合成語を
構成するようになった。これは，中国語の語構成
の規則に沿ったものであり，「外来語」を中国語と
して受け入れ，さらにその使用範囲をひろげてい
く中国語の特性で，同じ表意文字をもつ日本語を
受け入れやすくなっている土壌であると考える。
このように「料理」は、外的要因を背景に内の要因である語構成、語の特性、中国語の造語力を借りて使用範囲を広げ、本来の中国語より、「使い易い語彙」として受け入れられ、定着に至ったと結論付けた。

「外来語」としての「料理」は20数年間という長期借用期を経て、中国に移入された。その後の使用状態は、「料理」の「中国語本来の意味」としての使用と共存状態にあるが、筆者はこれを「外来語」移入の一つの形式として「長期共存型（仮称）」と名付けた。

「料理」は今後もこの共存状態が続くのか、また「料理」は、主に文化的分野で使用される語彙であるが、その他の政治、経済の分野で使用される語彙の場合に形式化が可能であるか、さらなる考察の必要があると考える。

注12 薛克洪「“写真”の来龙去脈」（『語文建設』1996. 第7期, 1996) 23頁
注13 奥永峻『中国語の語法の話』（光生館, 1985年）

参考文献

沈国威 『新漢語研究に関する思考』（『文林』32号, 1998.3）
高名凱・劉正治 『現代中国語における外来語研究』（鳥井克之訳, 関西大学出版部, 1998）
沈国威 『現代中国における日本製漢語』（『日本語学』Vol.12-3, 1994）
荒川秀清 『日本漢語の中国語への流入』（『日本語学』17号, 1998）

引用文献

目加田誠 『世説新語』（中国古典21, 明治書院, 1975）
田中静一・小島亜明・太田泰弘訳 『斎民要術』（雄山閣出版, 1997）
石見洋校注 『斎民要術今解』（新華書店, 1957）
仇兆鳌註 『漢興詩』（松村文庫局, 1683）
王汝滔主編 『广異记』（上齋魯書社, 1984）

鄱達夫 『游墨園』『鄱達夫全集』（第一巻, 折江文芸出版社, 1992）
黑板勝美編 『律・令義解』（第二十二巻, 吉川弘文館, 1966）
道元 『正法眼蔵』（二種, 水野弥穂子, 岩波書店, 1993）
福沢諭吉 『老余の半生』『福翁自伝』『福沢諭吉全集』（第7巻, 岩波書店, 1959）
山田晃注音読 『破戒』『島崎藤村集』I（角川書店, 1971）
岩崎保平著校注 『浮世風呂』（二編第二巻, 岩波書店, 1989）
『庭訓抄』（古典史料12, スミ書房, 1970）
朝倉治彦校訂 『長者教』『古文庫』（第82冊, 古典文庫, 1954）

（以上、清地ゆき子）

【あとがき】

1985年3月より1986年2月までの約一年間、中華人民共和国湖北省武漢市にある武漢大学外語学科日語研究室の招きに応じて、客員教授として日本語教育に従事した。その際、中国語に流入した日本語の調査も研究課題とし、若干の資料収集を行った。

「入」と「出」という日常的和語が「入」、「出」という形で流入していることに気付き、このような日常語がなぜ借用されたかについて考えたことがある。

中国語では「人の出入り口」には、ふつう「門」を使用し、「口」は用いない。例えば、日本語の「非常口」を中国語では「太平門」という。日本語の「口」は門の意を派生させているが、中国語にはこの意が「口」には無いのである。

「門」は本屋を含む独立した建築物である。一方「出入り口」は本屋の一部である。後者を表す特別な語彙を中国語は備えていなかった。その
不備を補うものとして「入口」「出口」が借用されるに至ったのであろう。

清地ゆき子氏の論文は、このような素朴なものではなく、現地での新聞調査を始めとする本格的調査に基づく論考である。規約上、名著としたが、実態においては本論は清地氏の単著である。

因みに、清地氏の論文指導について述べておく。

当初から一年半ほど、加藤二郎教授が指導をされていましたが、2002年8月17日、教授が急逝され、急遽小池が指導することになった。また、実際の細かな指導助言は、松金公正講師が行われた。小池は、ただただ感心し、励ますことを役目と考え実行したに過ぎない。

（以上、小池清治）
Summary

An analysis of Japanese adopted as words of foreign language in Modern Chinese

This research is on how imported Kanji words have been made root in modern Japanese with completely different meanings, and the Japan-origin meanings/usages have been adopted in modern Chinese as words of foreign origin.

"Cooking", "photograph" and "popularity" are taken as object of this study and I have analyzed the process of adoption, its features, range of naturalization and the factors of naturalization based on newspapers being issued in China.

The analysis shows that there are two patterns of form of adoption. One is a "pattern of long adoption term and coexistence" (temporary name). The other one is a "pattern of short adoption term and independent" (temporary name). "Cooking" and "photograph" belong to the former pattern and "popularity" belongs to the latter.

The background of this difference is based on feature in meaning/usage of each word and the fields where each word is used. The two common factors of naturalization in both patterns are the external one and the internal one. The former is close relationship between nations politically, economically and culturally. And the latter is the high word-building capacity of Chinese.

Through this analysis I conclude that in addition to the fact that Japanese and Chinese are both ideogram, above-mentioned external and internal factors made these three words are firmly naturalized as words of foreign origin in modern Chinese.